

ド ラ イ ブ

きたゆきこ



ドライブ

家を出てからまだ百メートルしか移動していない。なのに、すでに五分近くも足止めを食らっていることに、男はイライラが隠せないでいた。ハンドルに体を預けて上目遣いに見上げるのは暗闇に浮かぶ赤信号だ。もうかれこれ三分以上も同じ姿勢なのだが、信号は色を変える気配を見せない。

「そんなにイライラしないで。」

体重を預けているハンドルを、自分の意志では止めることができないといった様子で細かく小突き続けているのが気に入られていないようだった。

「ここ毎日通るけど、こんなに長かったかなあ～おっかしいなあ。」

気が長いほうではないことを普段から自負している男は、睨みつけても睨みつけても赤色を灯し続ける信号が、なにやら自分を嘲笑っているのではという錯覚にさえ陥り始めていた。

「なんだよ！この信号壊れてんじゃないの？」

すると、その言葉を合図として待っていたかのように、ぱっと青信号が灯った。

「おっしや。てかおっせえし。」

「長い信号だったね。」

男は意気揚々とアクセルを踏み、目の前に広がる道へと車を走らせた。広くて綺麗なばかりの真っ暗な田舎道には走るものも歩くものもこの車以外は見当たらず、男は貸切気分で思い切りアクセルを踏み込んだ。

「こんな人っ子一人いない道でさ、あんな長い時間止められる意味が分かんねえよ。」

冗談っぽく、軽く笑いながら呟いた。

「たった数分じゃない。そんな気持ちで運転してたら、途中で事故に遭っちゃうよ。そんなの目も当てられないじゃない。」

「事故なんか、こんな道じゃ起こりえないでしょ。」

そんなありきたりな言葉を交わしながらのドライブは、今のところ行き先未定である。

「さあて、どこ行こっかなあ～」

「どうせなら、高速乗っちゃったら？」

「高速いいねえ。この辺りじゃこの時間は車もほぼゼロだろうし、飛ばし放題最高かもな。」

言ってから内心で”しまった”と思ったが、どうやら遅かったようだ。

「高速だからとか車がないからって猛スピード出していいってことじゃないんだからね。途中で事故でもしたら台無しになるんだから。」

楽しい夏休みに入った途端、母親からうるさい小言をくらった子供のように、男は肩を軽くすくめるだけに留めた。

「とりあえず、高速決定で。」

「そうだね。高速、乗ろうよ。」

母親の小言など右から左の子供が元気に家を飛び出していくときと同じ光を目に湛え、道路と同様に新品で小綺麗な看板に従ってウィンカーを出した。

「あれ？お金、払わなくていいの？」

「今時なに言ってんだよ。ETCだよ、ETC。」

高速に入り、より強めにハンドルを握りながら、こいつは何を天然ぶっているのか、と内心にやげが止まらなかつたが言い合いの火種になるような気がして内心に押し込める事にした。

「ETC・・・へえ、何だか便利なものができてるんだね・・・私、外になんか出ないから知らなかつた・・・」

あえて自分から天然ぶりを露呈するような言葉に、先ほど飲み込んだ火種を披露しても大丈夫なのではという気がして慌てて胸の奥底をひっくり返した。しかし、あと少しで手が届くというところで話題が切り替わってしまった。

「高速に乗ったはいいけど、どこか行き先は決まってるの？」

あと一歩で手が届いたのにと胸の奥底へと続く穴の縁で地団太を踏んでいた男は、一瞬会話についていくのが遅れてしまった。

「ねえ、聞いている？」

「あ？うんうん、聞いているよ。」

「そう・・・」

もちろん嘘であるが、こういう時は嘘を吐くことが相手にとっても自分にとっても無難であるということを、三十数年に及ぶ人生経験によって、よく分かっていた。

「どこ行くの？」

「エ？何何？」

「だから、これからどこに行くの？」

「う～ん、そうだなあ・・・特に考えてないんだけど・・・」

「そう・・・」

乗ったはいいが、早めに行き先を決めないと延々タイミングを逃してしまい、帰るのが億劫になるような場所に運ばれてしまう可能性が大だった。まばらな街灯の光に薄っすらと照らされる緑が窓の外を流れていくのが瞳の端に映る。変わり映えのしない景色が延々と続く中、段々と以上これ考えるのが面倒臭くなってきた。

「もし決まってないなら、私いいところ知ってるんだけど。」

「え？」

自分で決断を下す人間は時間を損すると常々思っている男は、その提案に飛びついた。

「よっしゃ、じゃあそこ行こう。ナビお願いね。」

「うん。喜んで。」

「ちょうどさ、考えんのめんどくせ～とか思ってたところだったんだよ。」

「うん。そうだと思った。」

「よ～し、んじゃ、行きますか！」

「うん。」

「やっぱ、夜の高速は気持ちいいわあ～」

高速を軽快に飛ばしていく車内には、しばらく男のご機嫌な鼻歌が流れるのだった。

何も邪魔するものがない高速道路を軽快に飛ばしていく興奮に、鼻歌はカラオケへと取って代わっていた。とてもいい気分十八番を何曲か熱唱したが、それにも飽きてきたところに、小さな睡魔が男の瞼を押し下げようと画策し始めた。ハンドルと座席から体に伝わる微かな振動と代わり映えのない景色に、単調なエンジン音が心地よい子守唄に聞こえてくる。

「次の出口で下りて。」

「あ？あぁ、了解。」

いきなり耳に飛び込んできた声に、しめしめとほくそ笑んでいた睡魔が一気に退散していった。

「あ～助かった。もう少しで寝ちまうとこだったよ～マジ危なかったわ。」

ハンドルを握ったまま軽く伸びをすると、さらに頭がすっきりしてきた。

「まだ寝たら駄目だよ。もう少しだから。」

「よし、次で下りればいいんだな？」

「うん。そこからは、私が道案内するから。」

鼻歌にもカラオケにも飽きた男は、次は口笛でメロディを奏で始めた。

「音楽かけないの？」

「あぁ、今CD壊れてんだよね。だから聴きたくても聴けねえの。直す金もないしな。」

自嘲気味に笑い、再び口笛を吹く。

「それ・・・昔から好きだったよね。ドライブに連れて行ってくれたとき、よく聞いてた。」

男が奏でたのは、一昔前に大ブレイクしたバラードだった。

「この曲、今じゃ結婚式の定番曲だよな。あ・・・そうだ、結婚式あるんだ・・・」

男は小さく眉をしかめた。

「結婚式なんて、とてもめでたいことじゃない。素晴らしいわ。私には、全く縁のない話だったけど・・・」

「だってなぁ、ご祝儀で金が出てくばっかだよ。交通費、衣装代、二次会の会費にその後の飲み会代。一回の結婚式で軽く十万は飛んでくぜ？まぁ、楽しいっちゃ楽しいけどな。昔の仲間とも会えるし。はぁ～俺の春はまだかなぁ～～」

「・・・・・・・・」

ちょっと前までは電話で話す度にプレッシャーをかけてきた母親も、最近では諦めたのか結婚を急かすような話はぱったりとしなくなった。うるさく言われれば言われたでうっとうしいのだが言われなくなればそれはそれで何となく寂しかったりするのだ。何よりも、諦められてしまった自分が情けなく感じる。もしかしたら、そう思わせて相手探しに本腰を入れさせるのが何も言わなくなった母親の目的なのかも知れないとも思うが。

「彼女、いないの？」

「あぁ、まぁね。遊び相手ならいるけどさ、どれも本命じゃないんだよ。寝るだけならいいんだけど、付き合うとなると面倒なんだよねえ・・・」

「何か、トラウマがあるみたい。」

「え？そう？」

「昔もさ、嫌な事があつたらよくドライブに出てたよね。夜中だろうと何だろうと。」

「そうだなあ。免許取ってからは、ストレス発散は専らドライブオンリーだな。このすっ飛ばす爽快感がたまんねえんだよな。」

出口を示す標識を確認し、それに従ってウィンカーを出しながら、頭の中ではセピア色の思い出が広がっていた。

「ここを下りたらね、三つ目の信号を右に曲がって。」

頭の中の、多少美化された過去の自分を懐かしく見つめながらも、条件反射で頭を上下に動かした。高速を下りたその道は、乗ったときと負けず劣らずの人気[ひとけ]のなさだった。違う点といえば、こちらの道は狭くデコボコしており、決して走り良い道ではないというところだ。

「こんな道行って、何があんの？すっげえ田舎道・・・てか、建物全然見えねえけど・・・」

「景色の綺麗なところよ。崖の上からの景色が、昼間はとても綺麗なんだって。死ぬまでに一度見てみたいと思ってた場所なの。」

「へえ～・・・」

「ちょっと前に来たんだけど、その時は景色見る余裕がなくて・・・せつかく来たのに、もったいなかったなあって。」

ちょっと車を走らせるだけで体が馬車の御者のように激しく上下するのが段々と面白くなってきた。

「今日は、どんな嫌な事があつたの？」

「あ？ああ、いろ、いろいろあつたん、だよ。」

上下のリズムに時折言葉を遮られながらも、今日この深夜のドライブに出るに至った経緯を話し始めた。

「会社でさあ、またゴリラにせ、説教食らったんだよ。あいつ俺の営業成、成績が良いのに嫉妬して、んじゃねえかなあ。」

「ゴリラ？」

「先輩、だよ。俺の直属のせ、先輩。説教っても全、然中身な、無いんだぜ？この道でほんと、本当に合ってる、の？なん、かすっげえ、道だけど・・・」

「うん。間違いない。前に一度通ったからはっきり覚えてる。間違いない。」

確信に満ちたその声に、それ以上疑うような発言をする気が失せた。

「もう理不尽な説教ばっか、してくるしな、ゴリラの、奴。しか、しかもさ、あいつわざわざ、上司とか部下とかどう、同僚の前で、やるんだぜ？あいつ、マジうざ、うざいんだ、よ。」

「そう、そんなことがあつたの。・・・他には？」

「他？あ、ああ～えっと・・・他・・・」

「今日じゃなくても、何日か前に何かなかった？」

ハンドルをでこぼこ道にとられないようにしっかり握り、視線もヘッドライトが照らす目の前の暗い道に釘付けになりながらも、記憶の山から数日前の出来事を弄り回した。

「ああ、そうだそ、そうだ。あいつに、会ったな。忘れ、てたわ。」

「誰？」

「きむ、木村かお、りだよ。これ、この信号、三つ、目だよな。」

ハンドル操作に気を取られていたためウィンカーを出し忘れたが、そんなことを咎めたりする人も車もここにはいないだろう。地球上の生き物は自分を残して皆滅んでしまったのではと錯覚してしまうほど、何の気配もしない道だった。曲がった先は更に細い道で、今度は全く舗装されていない。幸いデコボコは解消されたが、代わりに泥を派手に跳ね飛ばす音が車内に響く。

「いや～すごい道から更にすごい道に出たなあ。」

「木村かおりに、どこで会ったの？」

「この間たまたま行ったカラオケでさ、陰気に掃除してやがったよ。一気に酔いが醒めたなあ、あれは。」

「・・・どうして？」

「昔もそうだったけど、あいつの顔は辛気臭いんだよ。な～んで俺、あんなのと付き合ったかなあ。当時の自分の気い疑うよ。」

苦笑交じりに言いながら、その辛気臭い顔が脳裏に浮かんできた。

数日前、会社の同僚と飲みに行った帰り、たまたま清掃員として来ていた元カノの木村かおりとぼったり会った。一瞬気付かなかったふりをしようと思ったのだが、向こうから声を掛けられてしまい、挨拶をしないわけにはいかなくなった。普通の間人間があまり会いたくない人物に凶らずして遭遇してしまった場合に大抵がそうするように、目も合わさず、軽く会釈をするだけに留めたが、後から他の三人に散々囃されて、辟易したものだった。

「一度は付き合ったのに、そんなに邪険に扱う事ないじゃない・・・酷いわ・・・」

それには人にはおいそれと話すことができない事情があった。その後ろめたさが、元カノを邪険に扱うという行為に現れたのだと、自分でも自覚している。

「ねえ、どうして？」

「いやあさ、あいつと、かおりと付き合ってたのは大学生のときだったんだけどさ、その時あいつ、まだ高校生だったんだよ。んでさ、できちゃったんだよねえ・・・ガキが。でも俺まだ学生で遊びたい盛りじゃん？あいつも高校生だしで、なんか産む気満々だったのを、俺、いろいろ理由つけて墮ろさせたんだよねえ・・・したらさあ、もう会う度に泣きやがるし、電話もメールも陰気陰気で、いい加減イライラしてよお。会ってもやらせなくなったし、一ヶ月くらいは我慢したけどもう面倒になって、俺から別れ話したわけ。」

自分は何故こんな話をぺらぺらと喋っているのだろうか。もう黙ろう。そう思っても、口は止まらなかった。

「そしたらさ、あいつどうしたと思う？泣きながら足にしがみついてくるんだぜ？『別れたくない～』って泣き叫びながらさ。ホラー映画かと思ったわ、マジ。涙はまだしも、結構高かったジーンズに鼻水つけられたときはキレそうになったね。」

この話、全く同じ、一言一句同じ内容を、誰かに話したことがあるような気がする・・・そうだ、別れたあと、友達数人で集まったときに鉄板の笑い話として、よく披露してた・・・

「それで？」

「あ？ああ。何とか説得したよ。俺じゃお前を幸せにできないとか、もっといい男の方がお前には合うとかさ。まあ、色々思っても無いことを並べ立てて、最後は逃げてきたよ。しばらくはテレビから貞子みたいにあいつが出てくんじゃねえかって怖かったわあ。」

大きな固唾を一つ飲み込んだ。何故か汗が止まらない。ここはどこで、自分はどうしてこんな話をしているんだろうか・・・その疑問が頭から離れない。

「・・・そういうことが重なって、今日のドライブになったんだね。」

「・・・あ？あ、うんそう。そうそう。止めはあの結婚式の招待状だったな。んで、あれ見たときにもうブチンときてさ、もうドライブ行くしかねえ！ってなって、鍵と財布と携帯だけ持って、一人家を飛び出したってわけよ。」

行った途端、男の思考が一旦停止した。サブリミナルのように家を出る自分の姿が脳裏に甦る。そうだ、会社から帰って、手紙を見て、そのまま必要最低限のものだけ持って、一人家を出た。一人で車に乗って、エンジンを掛けて、走り出した。

「・・・俺・・・」

そこまで行ったとき、何かが喉を塞いで呼吸がままならなくなった。声にならない声が、頭の中にこだまする。

(俺は、誰と、しゃべってんだ・・・?)

気がついたら手は小刻みに震え、止まらなくなっていた汗は脂汗となり、全身からじっとりと染み出している。ハンドルを取られないように手の震えを何とか押えようと思うのだが、全く言う事をきかない。全身が硬直し、首を回す事もできない。かろうじて目の端に映る助手席には、エプロンをかけた女の膝と、その上に置かれたガサガサであかぎれだらけの白い手が見えた。顔を見ることはできなかったが、見覚えのあるエプロンで、それが誰だか男には分かった。

(か、かお、かおり、かおり、だ・・・こいつ、かおり・・・)

「今頃気付いた・・・？」

さっきまで車内に響いていた泥を跳ねる音は消え、女の声だけが耳に突き刺さった。

「私、あの時はまだ高校生だった。子供だった。子供で何も分からなくて、何も知らなかった。だけど、本当に墮ろしたくなかった・・・すごく産みたかった。自分の子供を、自分の中に生まれた命を、愛して、この手で育てていきたくかった。なのに私は、自分の子供を殺したの。自分の手で、殺しちゃったのよ・・・苦しくて苦しくて、毎日死にたかった。死ぬ事しか考えられなかった。私も死んで、赤ちゃんのところに行きたかった。見たこともない私の赤ちゃんが、毎日夢に出てきて言うのよ。ママ、寂しい、痛い、苦しいって。助けてって・・・側に行つてあげなきゃって思つて、手首を切つたことも何度もあるわ。今でもそうなの・・・生きてても何も楽しくないし、私は幸せになつてなれないのよ・・・なつちやいけないの・・・だって、自分の子供を殺したんだもの・・・なのに、あなたはそんな私の苦しみを知りもしないで、知ろうともしないで、楽しそうだったわ・・・お酒なんか飲んで、楽しそうに歌つて、喋つて、騒いでたわ・・・そんなあなたを見てね、私、思つたの・・・」

まるで富士山頂にでもいるかのように息が苦しくなった男は、少しでも多くの酸素を肺に取り込もうと必死で周りの空気を貪った。喉は見えない何かに締め上げられ、声は喉の奥に張り付いて出てこない。脂汗は止まらず、手の震えはどんどん大きくなり今では全身に広がっている。

（言うな！もう、何も言うな・・・！）

「あなたなんか、死ねばいいって・・・」

その冷たい女の声が、喉に張り付いていた声を決壊させた。

「うああああああああああああああ！！」

静まり返った車内には、男の激しい息遣いだけが響いていた。決壊した声と共に体の強張りが一気に解け、気がついたら思い切りブレーキを踏んでいた。どれくらい時間が経っただろうか、ゆっくりと顔を上げた男の目映ったのは、街灯など一つも無い、真っ暗闇だった。果たしてここがどこなのか、道なのかどうかさえ、運転席に座っている限りでは分からなかった。大きく一つ息を呑み、一回硬く目を閉じて、それを一気に開くと同時に助手席を振り向いた。しかし、そこには何日か前に買ったスポーツ新聞が置いてあるだけだった。誰かが座っていた形跡など、微塵もなかった。恐る恐る後部座席に顔を向けたが、空のペットボトルや潰れたティッシュの箱が散乱しているだけで、人の気配はやはりしなかった。大きく息をつき、ゆっくりとポケットから取り出した携帯電話を開いてみると、すでに夜中の三時になろうかという時間だった。

「・・・さっきの・・・なんだったんだ・・・？」

ぼつりと呟いた声が、やけに車内に大きく響いたような気がした。ついさっきまでの出来事が、まるで嘘であるかのような静けさに、男は段々と正気を取り戻しつつあった。

「お、俺・・・寝ぼけてた、かな・・・」

説明がつかないこの状況になんとか辻褄が合うだけの理由をつけようと必死で頭を回転させた。しかし、結局は到底納得のいかないような理由を無理やり信じ込むしか道は無かった。

「そう、そ、そうだな。俺、疲れてたし・・・ね、眠かったし・・・きっとぼーっとしてたんだ。そうだな。そ、そうだな、きっと。」

自分に言い聞かせるように呟いていると、暗闇に目が慣れてきた。

「はあ～・・・ここ、どこだ？」

きよろきよろと見回すと、運転席の窓に土の壁が迫っているのに気がつき、思わず体が仰け反った。恐る恐る上を仰ぎ見てみたが、壁は高く高く聳え立ち、先は夜の闇に溶け込んでいた。

「崖・・・？危ねえ・・・激突するところだったってわけか？」

急に車内が真冬の深夜のような寒さに覆われて身震いがした。両腕から始まり、全身を鳥肌が覆う。一度は収まった震えが再び体中に広がり始めた。先ほどの出来事が鮮明に脳裏に浮かび上がりそうになるのを阻止するかのように、両手で頬を何度か叩く。そして、一息ついて車のエンジンを入れた。

大きなエンジン音と共に光を放ったヘッドライトが照らし出した目の前の光景に、地獄の底から轟くような男の悲鳴が重なった・・・

偶然再会したときと全く同じ清掃服とエプロンを纏ったままの木村かおりが、血の海の中で横たわっていた。両手両足はそれぞれ在らぬ方を向いており、右足はほとんど千切れている。その姿は、地面に衝突したときの衝撃の凄まじさを物語っていた。顔の穴という穴から流れ出した黒い血に染まった顔の中で、見開かれた目が異様に白く浮き上がっていた。その白く濁った目は、まるでそれ自体が生きているかのように、男を捕らえて離さなかった・・・

「・・・あなたなんか、死ねばいいって思った。思ったのに、私には、何もできない。どうする事もできない。私は、これからもずっと、一人で苦しみ続けなくちゃいけないの・・・？そんなの、つらすぎる。私はもう、耐えられない・・・もう、終わりにしたい・・・そう思ってここに来たの。だけど、誰も私を見つけてくれない。だから、あなたを呼んだの。ずっと我慢してきたことを、飲み込んできたことを、言ってやりたかったの・・・あなたがこの先、幸せになんかなれないように。ずっと私を、忘れないように・・・」

ドライブ

<http://p.booklog.jp/book/54292>

著者 : kita-yukiko-0727

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/kita-yukiko-0727/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/54292>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/54292>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社ブクログ